



滋慶大学院新聞

発行所 学校法人 大阪滋慶学園
滋慶医療科学大学院大学
大阪市淀川区宮原1-2-8
TEL.06-6150-1336
http://www.ghsj.ac.jp

第5号 発行責任者 橋本 勝信
発行日 2017年(平成29年)6月30日

施設・環境から考える医療安全



一般社団法人 日本医療・病院管理学会 理事長
工学院大学 建築学部建築デザイン学科 教授

筧 淳夫氏

転倒、転落、挟み込み（以下、転倒・転落と省略）といった事故を防止するために、多くの病院では患者のアセスメントを行っています。年齢や疾病以外にも、これまでの転倒・転落の既往歴、特定の薬を服用の有無、患者の動作能力などを評価することによって、患者をいくつかの段階のグループに分けています。これらのアセスメントは転倒・転落の「リスク」を評価するものであり、転倒・転落を起こしやすい患者を見つけ出すためには有効である。しかし、問題はこうやって見つけ出したリスクの高い患者に対して、どのように転倒・転落対策を組み立ててゆくかである。

ところで、転倒・転落はその最終的なきっかけをつくるのが患者である、という点が他の医療事故と大きく異なる。多くの医療事故は、最終的には医療スタッフが行った行動によって発生するが、転倒・転落は患者が動くことによって発生することが多い。現場

では、こうした転倒・転落に対して「アセスメントのしなおし」と「頻回な訪室」といった目と手の数による対策がよく講じられるが、患者の動作をきっかけとして起こる事故の場合、こういった「人的対策」には自ずと限界がある。そこで、目と手の数に頼らない「物的対策」が必要となる。ここでいう物的対策とは転倒・転落を起こさないための「発生予防対策」と、転倒・転落が起きても大きな事故にしないための「傷害予防対策」の二つに分けられる。

よって、転倒・転落事故を軽減するための課題は、適切な対策を立てるためのシステム化であり、そのため転倒・転落事故対策のアセスメントを行うことにあると考えられる。一方で、転倒・転落のような患者の療養環境の安全性だけでなく、医療スタッフの作業環境の安全性も大きな課題である。例えば医療スタッフにとって分かりやすいサインの掲示は、ケアを行う上での誤認を予防する。医療スタッフが患者の状態やニーズを把握しやすくするために、患者の様子を知覚しやすい病棟内の空間構成が求められる。また、スタッフステーションをはじめとして、病室や处置室などでケアを行う際には、文字をはっきりと読み取り、機器の選択を間違えにくい光環境計画や色彩計画なども考えなければならない。このように患者の療養環境と医療スタッフの作業環境の両面から施設環境を整えることにより、事故を起こし難く、不幸にして事故が起きても被害を最小限にとどめる環境を確保することが望まれる。

筧 淳夫氏 略歴

1959年生まれ、工学院大学建築学部建築デザイン学科教授、工学博士。1989年東京都立大学工学研究科建築学専攻博士課程修了、1989年病院管理研究所建築設備部、2000年国立医療・病院管理研究所施設設計画研究部長、2002年国立保健医療科学院施設科学部長（組織再編）を歴任、2011年4月から工学院大学建築学部建築デザイン学科教授、現在に至る。主な研究テーマは、医療施設設計、高齢者施設設計、病院管理、感染管理、医療安全、災害看護。現在、一般社団法人日本医療・病院管理学会理事長、一般社団法人日本看護管理学会評議員、日本災害看護学会監事、日本医療福祉建築学会理事ほか。主な著書、『看護の統合と実践① 看護管理』医学書院、2012年。『看護マネジメント論第3巻』日本看護協会出版会、2011年。

2016年度 大学機関別認証評価の結果について

認証評価とは、学校教育法第109条および学校教育法施行令第40条に定められ、大学の総合的な状況について、文部科学大臣が認証する評価機関（認証評価機関）による7年（専門職大学院の課程は5年）以内に一度受けるものとされている評価のことをいいます。すべての大学は、その教育研究水準の向上を目的として、教育研究、組織運営及び施設設備の総合的な状況に関する自己点検評価を行い、それをもとに認証評価機関がそれぞれの基準に基づき評価を行います。

滋慶医療科学大学院大学では、2016年度に公益財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受審し、2017年3月7日付で「同評価機関が定める大学評価基準に適合している」と認定されました。



本学では、この認証評価結果を踏まえて、教育研究活動のさらなる改善と向上をはかり、建学の理念のもと、医療マネジメントにおけるリーダーシップを持った人材育成に努めてまいります。

なお、自己点検評価の結果をまとめた「平成28年度 滋慶医療科学大学院大学自己点検評価書」、並びに評価結果をまとめた「滋慶医療科学大学院大学 平成28年度 大学機関別認証評価 評価報告書」は、本学ホームページに掲載していますので、ご覧ください。

研究科長に岡崎正之教授が就任

2017年度より滋慶医療科学大学院大学医療管理学研究科の研究科長として岡崎正之教授が就任しました。岡崎教授は、国立大学法人広島大学歯学部教授、2011年同大名誉教授、2014年4月から本学教授。専門分野は、生体材料学、医療機器材料安全管理学。



温故知新に学び医療安全を科学する

滋慶医療科学大学院大学 研究科長 教授

岡崎 正之

蘭医学研究者の緒方洪庵が大阪の船場に開いた「適塾」は近代医学の礎だけではなく、幕末から明治維新の教育研究の先駆けとなりました。洪庵は、維新の立役者となった英才を育てるだけでなく、適塾で学んだ塾生が郷里に帰って開業医となり地域医療や種痘事業に貢献するきっかけをつくったとのことです（大阪大学適塾記念センター概要より）。ところで、この適塾の「適」の意味ですが、「己に適する、をもって適とする」という意味であることを、ある時米国で活躍されていた大阪大学医学部出身の先生から教わりました。それ以来、私の座右の銘として「適」を掲げて教育・研究に携わってきました。

このように明治維新の近代化以降、科学の急速な発達により特に医学の進歩には目を見張るものがあります。しかし一方では、医療の高度化に伴い医療現場では組織やシステムが複雑化し、人手不足は深刻で「医療の質と安全」をどのように管理していくかが重要な社会問題となっています。本大学院は、医療安全管理学の研究を通して、この国民的課題に取り組み、少しでも社会に寄与することを目的として創設されたユニークな日本で唯一の大学院大学です。

21世紀に入り、社会は、世界は大きく変動しようとしています。これまでの社会基盤となっていた村社会は若者のいない元気をなくした孤立社会となりつつあります。無医村が増え、地域社会の中で医療体制を堅持することが困難となり、ましてや「医療の質と安全」をどのようにして担保して行くのか、非常に難しい問題に直面しています。以前は、医学を学び地元に帰って地域社会に貢献し

ていた医療人も少くなり、そうしたくともできない社会構造が生まれてしまっています。この国民的課題に投げかけられたテーマが「地域包括ケア」です。

ここで少し工学的側面から、この問題を考えてみたいと思います。自動車産業では、20世紀の後半からいち早く人手不足と質的向上的観点から産業用ロボットを導入し、最近では安全運転を支援する自動システム化も進んでいます。交通機関でも事故防止の観点から、すでに1960年代より自動列車制御装置（ATS）が採用されています。医療の現場でも、ダヴィンチのような手術支援ロボットや介護補助ロボットが登場しつつあります。

医療や介護の現場にロボットを導入することも一つの手段といえるでしょう。ただ、心のケアを如何にしてシステム化して行くのか、これも今後の大きな研究テーマです。看護や介護の原点となる「心のケア」をAIやロボットがどれだけ補助・支援できるのか、限られた国民医療費財源と不足するマンパワーを使って超高齢社会を乗り越えて行くには、ロボット的発想は宿命なのかも知れません。19世紀の産業革命以来、文明は急速な勢いで発展し、エネルギーを消費してきました。我々の生活は豊かになり寿命は大きく伸びてきましたが、心の豊かさは必ずしもそれに比例しているとは限りません。医療の本質を見極める時期に来ている気もします。

いずれにせよ、「医療の質と安全」に関する研究テーマは身近に山積しています。本学は小さな大学院ではありますが、学長と教職員が一丸となって、この大きな課題に取り組み医療安全を科学しようとしています。



平成28年度 修士学位論文公聴会開催

2017年2月11日(土)・12日(日)の両日に本学視聴覚大教室で平成28年度修士学位論文公聴会が開催され、学生達がそれぞれの研究課題について発表しました。

入学してから2年が経とうとし、学生は医療現場や教育現場で働きながら、指導教員や学生同士でコミュニケーションを図り、研究活動を進めてきました。また、仕事と家庭、学修・研究を両立させ、その成果を発表する場として、この日の公聴会に臨みました。発表者は、それぞれがスライドを駆使して緊張した面持ちで発表を行いました。質疑応答では、主査・副査から多くの質問と意見が出され、想定外の鋭い質問もありましたが、無事、全員発表を終了する事が出来ました。

発表を終えた学生から、自分では理解していても、他人にどう伝えるか、理解していただけるか、改めてプレゼンテーションの難しさを知りましたとの声がありました。これを機にさらなる成長を期待したいと思います。

なお、研究内容は、学術雑誌や論文投稿および学会発表を通じて公表をおこなうよう指導しています。今後は、研究のデータ等を提供いただいた医療機関等へも結果を報告する予定です。修士論文の作成にご支援・ご協力をいただいた関係者の皆様に改めて御礼を申し上げます。



テーマ観

- 投資が病院の競争優位に与える影響
- 透析患者の筋肉量や透析後の起立時低血圧が、めまい/ふらつき・転倒・骨折や非透析日のADLに及ぼす影響の検討
- Patient Safety の視点から見た多職種連携と専門性の発揮に関する研究
～気管切開術後の管理に焦点をあてて～
- 病棟看護師長の職務機能に注目したストレスマネジメントの有効性に関する検討
—職務の俯瞰に基づいたコーピングの提案とその有効性の検討—
- 重度要介護高齢者の在宅養成継続要因とその支援～認知症を除くデイケア利用者を対象に～
- 認知症高齢者の自律的口腔ケアの形成:回復期リハビリテーション病棟における試み
- 中規模急性期病院における感染制御・栄養管理チーム連携による
中心静脈カテーテル管理改善の取り組みと各種臨床指標調査
- 看護技術習得における教育方法の有効性検証:移乗介助技術に焦点を当てて
- 看護管理における看護師業務の可視化の意義—診療における看護業務割合の調査から—
- がん登録とDPCのデータを用いたがん医療可視化モデルの構築
- 外来看護師における休憩の現状と休憩が自覚的気分に及ぼす影響
- 転倒転落事故防止を目的とした看護師と患者における待機時間の認識調査
- 病棟看護師の退院支援に関するコンピテンシー
—専任の退院支援看護師を配置していない病棟看護師を対象として—
- 医療機器の安全管理体制の中日比較研究
—医用電気機器及び病院電気設備の安全基準の中日比較を通して—
- 安全なフットケアのための超音波血流探知器ドプラ音とABI値の関連性
- 入院患者を対象とした内服関連業務におけるエラー生起と回避のプロセスの可視化:
機能共鳴解析手法を用いた分析
- 入院患者情報の集約と共有による医療安全向上に関する研究
- 精神保健福祉士の認知的技能に関する探索的研究
- 化粧品および医薬部外品に使用される防腐剤における防腐作用と細胞毒性との関連性に関する研究
- 複数の医療従事者(看護師)による薬剤における有害事象のメカニズムの探求
- 介護老人福祉施設における介護従事者に関する実態調査—新カリキュラムで求められる内容を基に—

平成28年度 学位記授与式

2017年3月19日(日)、滋慶医療科学大学院大学の「平成28年度学位記授与式」が挙行され、第5期生21名に学位記が授与されました。

学位記授与式の告示の中で武田裕学長は、家庭を持ち、仕事をこなしながら、学業に邁進してきた修了生にねぎらいの言葉をかけ、「これから社会は、地域で完結するような患者、利用者の安全安心をどうつくっていくかが課題です。皆さんはぜひこれに取り組んでいただきたい」と述べて、一人ひとりに言葉をかけながら学位記を授与しました。

次いで、浮舟邦彦理事長が「大変苦労して学業を成し遂げたその経験は、一人ひとりのキャリアを作っていく上で大きな支えになるでしょう。医療安全の分野は日本ではまだ研究者が少なく、皆さんはバイオニアとしてこの分野を開拓していくください」と述べ、今後も研究を継続し、多くの学会等で発表して社会に貢献して欲しいと言葉を贈りました。最後に、埼玉県の病院に勤務しながら遠距離通学で修士論文を仕上げた修了生代表は、「志の高い仲間と出会って、共に学び、悩み、時に笑い、なによりも思考するという大事な時間を持つことができました。職種によって問題の捉え方が違う多くの医療職と共に、ぶつかり合いながらも一つのものを作り上げる学びは、他では経験することができません。ここで得られた経験は、今後、医療現場でリーダーとなるために不可欠な能力だと思います。この大学院で学んだ誇りを胸に凛とした姿勢で突き進んでいきます」と決意を述べました。修了生の皆様の今後のご活躍をお祈りいたします。



平成29年度 入学式

2017年4月2日(日)、滋慶医療科学大学院大学では「平成29年度入学式」を挙行いたしました。

今年度の入学生は、看護師をはじめ薬剤師や臨床工学技士、診療情報管理士などで、いずれも仕事や家庭を持ちながら向学心に燃える18名が入学しました。



浮舟邦彦理事長は、「これからは、医療と福祉の垣根を越えた連携や医療機関同士の垣根を越えた連携が求められます。職種間の連携が重要となり、リスクマネジメントについての経営課題に取組むこととなります。職種間連携はこの学びの中から生まれると思いますので、この機会を生かし、それぞれの研究を深めてください」と激励されました。ご来賓の代表として、地方独立行政法人大阪府立病院機構の遠山正彌理事長からは、「特定機能病院には医療安全管理を行なうための常勤の医師とスタッフの配置が義務付けられています。ここは医療安全を学ぶ日本での唯一の大学院大学ですので、そこに入学された誇りを持って頑張ってください」という祝辞をいただきました。最後に入学生代表が「これから2年間、専門性豊かな先生方のご指導を受け、それぞれの課題を追求すると共に、多職種の経験豊かな学友と刺激しあって、新たな体験を積み重ね、リーダーとして実践者として成長していくよう、日々、努力します」と力を込めて宣誓しました。

患者参加論
特別セミナー

レジリエンス・エンジニアリングの観点から 観た患者参加型医療

2016年11月30日、University of British ColumbiaのCanfield Carolyn先生をお招きして、「患者参加論」に関連した特別セミナーを開催しました。

Canfield先生は、2008年に術後合併症で夫を亡くされ、それを機にレジリエンス・エンジニアリング(上手くいくことを増やす)の視点から医療における患者参加の必要性について活発な活動をされています。2014年には母



国カナダにおいてCanada Patient Safety Championとして表彰され、現在University of British Columbiaの医学部で教鞭をとり、世界各国における国際学会でも講演されています。

今回は、本学の必修科目である「患者参加論」に関連するセミナーとして、そのレジリエンス・エンジニアリングの観点から観た患者参加型医療の重要性についてご講演頂きました。患者の目には医療はどのように見えるのか、患者が考える患者中心の医療とは、患者安全と医療の質保証の関係とは、そして、患者が望む医療とは、これらについて哲学的観点を含めた内容の講演でした。

Canfield先生は、医療というシステムの中で患者安全を考える時、益を最大限にして害を最小限にすることがリスクマネジメントには必要だが、それを患者のためにという発想ではなく、患者と一緒にという発想が必要であると述べられました。そして、「完全に安全な医療」の整備というものは到底成し得るものではなく、「より安全な医療」の構築を目指す必要があることを改めて認識させられる講演でした。

講義終了後には、参加していた本学の院生より、日本では自身の望みを表現しない患者が多いため、どのように接したら患者の望みを引き出すことができるのか、という質問がありました。Canfield先生は、患者さんに「我々医療者があなたについて知つておいた方が良い事はありますか」と尋ねることを勧めると返答されました。質問した院生は、平素そのような問い合わせを患者に行っていない事を気づいた、と自身を振り返っていました。

「仕掛け」とは?

2017年3月2日(木)、本学9階大講義室にて大阪大学大学院経済学研究科准教授の松村真宏(まつむらなおひろ)先生をお招きして、「仕掛け」に関するセミナーを開催しました。

仕掛けとは、人が「ついしたくなる」行動をデザインするための環境変更アプローチを分析し、体系化された「できたてホヤホヤ」の研究分野です。具体的な「仕掛け」の例を挙げると、通行人のポイ捨てが多い路地



に鳥居を模したサインを置いておくとポイ捨ての数が減る、階段をピアノに見立て階段を踏むごとに音が鳴るようにすると人々はエスカレーターではなく階段を使うようになります。ここで共通することは、①解決したい問題があること、②環境に変更を加えること(これが「仕掛け」)、③それによって人々が「いつも取っている行動」以外の行動の選択肢ができる、④別の行動の選択肢を選ぶ人が増えることによって当初の問題が解消されることです。これは医療の現場、特に医療安全においてもひじょうに役立つ発想なのではないでしょうか。従来、医療安全の分野では医療者の確認行動や注意喚起の回数を増やすことが考えられてきました。しかし人は「意識」や「ルール」を変えるだけで確認できるようになります。集中力が増したりするものではありません。それが人間の特性というものであり、訓練で簡単に変えられるようなものではありませんが、「仕掛け」によって医療職者や患者の方々の行動を変えることはできるかも知れません。

「仕掛け」は新しい研究分野です。医療の現場で仕掛けを用意することでどれだけのインシデントが防げたか、といったデータはまだありません。どなたか本学で一緒に「医療安全のための仕掛け」について研究してみませんか?

新任教員紹介



加納 隆先生

略歴

1973年上智大学理工学部電気電子工学科卒業後、三井記念病院MEサービス部主任臨床工学技士を経て、2004年博士(学術)を取得。その後、埼玉医科大学保健医療学部医用生体工学科教授、同大学大学院医学研究科医科学専攻教授を兼任、2017年4月から本学教授。

医療安全に工学技術を生かす

私は大学の工学部を卒業してから、縁あって都内の病院に就職しました。まったく異例のことでしたが、卒研でお世話になった先生がその当時、超音波の医学応用についての研究開発を行っていたことがこの道に入るきっかけとなりました。後にも先にも医療機器メーカーに就職する先輩後輩はいても病院に就職する者は皆無に近かったですし、未だに工学部と医療現場の距離は遠いと言わざるを得ませんが、臨床工学技士が誕生して、その間の橋渡しになる人材が登場したと言えるのではないかと考えています。

従来から、新たな医療機器を開発する場合、医師と工学者が協力・連携して行っていましたが、必ずしも十分な意思疎通ができていたとは限らないのではないかと思います。医師からのニーズは医療におけるニーズを代表していることは確かですが、実現性、経済性、安全性などの具体的な問題、それも特に臨床工学的な見が必要なことについては、必ずしも的確とは言えないのではないかでしょうか。この両者の間にあって、通訳的な役割を果たすのが臨床工学技士ではないかと考えています。

私自身、様々な研究開発に関わってきましたが、その多くは医療機器や設備環境の安全性の向上に関する研究です。市販されている医療機器は定められた安全基準をクリアしていますが、実際の使用環境において全く安全性に問題がないかと言えば、それは否です。過去の医療事故の苦い経験から、それを克服する形で進化してきていることは認めますが、まだまだ不十分を感じています。また、よく医療機器

の故障が原因の事故は少なく、操作ミスによる事故が多い、だからしっかり使用者教育をしなくてはならないと言います。確かに教育は重要ですが、しっかり教育をしなくては安全性が保てない医療機器も問題ではないでしょうか。ある社会学者の先生が「人のせいにするな、物のせいにせよ」と言われていましたが、私も全く同感で、とことん安全な「ものづくり」を極めて行きたいと思っています。そのためには良き研究開発パートナー（その多くは企業の方々）との出会いは必須で、最終的な製品化まで辿り着くためにはなくてはならない存在です。私の研究開発に関するポリシーは「製品化するところまで行かないと意味がない」で、医療関連製品の開発は実用化され医療現場で役に立つまでの見通しが重要です。それがなければ企業の方々の心は動かせないと思っています。

私が関わった最近の産学連携成功例には、埼玉医大と大成建設が共同開発した「電波を利用した医療機器所在管理システム」がありますが、これはさらに既存の機器管理データベースシステム（フクダ電子）との連携システムの製品化に繋がりました。また、埼玉医大と日立システムズが共同開発した「生命維持装置の遠隔一元監視システム」では、私の研究室と国際医療センターMEサービス部（臨床工学部門）による臨床工学的評価が製品化への大きな力となっています。このように、多くの方々とともに医療安全の向上につながるものを作り出すことは至上の喜びですし、今後とも医療現場に根差した製品開発に努力して行きたいと考えています。



前倉 亮治先生

略歴

1977年大阪市立大学医学部卒業 医師免許取得後、国立療養所刀根山病院循環器科医長、2006年国立病院機構刀根山病院副院长等を務め、2017年4月から本学教授。

今までの研究の流れと今後の抱負について

私は、1977年に大阪市立大学医学部卒業時に、「ベッドサイドで役に立つ研究」がしたくて国立療養所刀根山病院に就職を希望したが空席がなく、刀根山結核研究所（生化学3）大学院博士課程に入学し、「結核菌細胞壁にある長鎖脂肪酸（ミコール酸）の合成」の研究を始めた。1979年に刀根山病院循環器科医師の席が空き就職したが、堀院長の指示で「肺性心」の研修を目的に国立循環器病センター心臓内科研究生となり、臨床医としての指導を受けることになった。1年後刀根山病院に戻り循環器科医師として多くの呼吸器疾患（結核・呼吸不全など）患者を診察しながら刀根山結核研究所の研究生として基礎研究を継続し、1985年に「Nocardia rubraにおける長鎖脂肪酸合成に関する研究」で医学博士の学位を取得した。同年に豊能町健康管理室室長と国保診療所所長として出向し、肺がん検診をはじめ診療所の赤字経営を改善して診療所を建て替えた。ここで地域医療と在宅ケアにおける訪問看護の重要性を学んだ。1989年に刀根山病院の呼吸不全病棟医長として復職し、慢性呼吸不全患者の呼吸ケアを中心とした臨床研究と抗酸菌の基礎研究を開始した。

臨床研究（呼吸ケア）では、運動負荷心肺機能検査を用いた「労作時息切れ」の病態解明と「少しでも楽に安心してより長く在宅で過ごすことが出来る」呼吸リハビリテーションの確立を目指した。1993年から訪問看護を開始し、1996年には呼吸ケア専門の刀根山訪問看護ステーションを設立した。2002年に作業療法を呼吸リハビリテーションに加えることでCOPD患者の予後を改善することを報告し保険収載された。「在宅酸素療法症例における介護保険制度の問題点と対策」や「呼吸器疾患の身体障害者認定における障害程度等級と運動機能障害についての検討」を公表し、慢性呼吸不全患者の在宅生活の環境改善に努力してきた。現在は

“Personalized pulmonary rehabilitation and occupational therapy based on cardiopulmonary exercise testing for patients with advanced chronic obstructive pulmonary disease.” を完成させ、“呼吸リハビリテーション症例検討会”を中心に普及に努めている。さらに東洋医学（鍼灸治療）がより「労作時呼吸困難」を改善し、超重症例でも食欲改善効果があることを発見し、『東西医学のCollaboration』を目指している。

抗酸菌の基礎研究（血清診断）では1993年 Cord factor (trehalose-6,6'-dimycolate) を抗原とした結核血清診断法を開発し、TBGLキットを保険収載した。しかし、非結核性抗酸菌症や結核菌潜伏感染で偽陽性を示すことから、非結核性抗酸菌症（肺MAC症）に特異的な抗MAC抗体キットを開発し2011年に保険収載した。現在は、休眠菌感染（潜在感染）や非結核性抗酸菌を鑑別できるキットを開発中である。

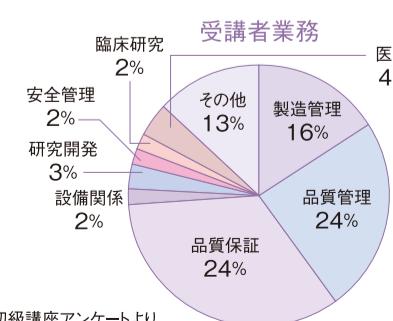
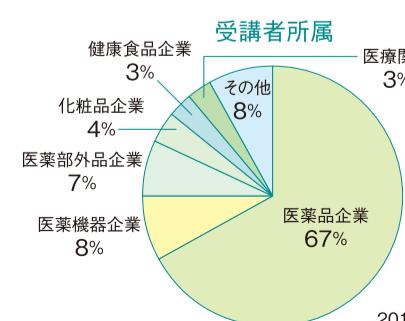
急速に高齢化が進む日本では、療養型病床、介護施設、グループホームで集団生活する高齢者が増え、また急病で救急病院に救急搬送される高齢者も増加している。これらの施設では、結核の集団感染を予防するための感染対策が重要になるが、呼吸器の専門医が不足しており診断の遅れが問題になっている。開発中の抗酸菌感染鑑別キットが完成すれば、血液検査で結核菌感染の有無が診断でき、専門医でなくても病気の存在を疑い検査を進めるきっかけになる。血液検査であれば、緊急検査や定期検査に加えても患者負担は少なく、Low costで行うことが可能であり、介護施設や医療現場での感染管理に役に立つと考えている。

最後にお願いですが、長年健康のために続けてきたテニスが少し上達してきたので、体調を整えてシニアの大会に挑戦しようと考えています。残り少ない年寄りの最後の挑戦ですので、暖かくお見守りお願いいたします。

GMP初級講座・実践講座2017のご案内

2015年11月に発足した医薬品等製造実践教育研究会は、医療の質・安全の根幹となる医薬品・医薬部外品・化粧品・医療機器や健康食品などの製造に関する実践的教育の支援と産・学・医の情報交換の場の創成を目指しています。昨年度は医薬品製造と品質管理の基準であるGMPの教育支援を目的とし、製造企業出身で講演・指導経験豊富な顧問・講師とともにカリキュラムを構築し、月1回3回連続の初級講座と2回の実践講座を開講しました。これまでに延べ250名を越える受講者を得、受講者アンケートでは約67%が医薬品製造、その他医療機器、医薬部外品、健康食品、化粧品の製造企業の従業者であり、業務としては品質保証、品質管理及び製造管理に74%が従事していました。受講後の満足度は高く、教育支援の目的が達成されたと考えています。今後も引き続き企業の新入者教育、製造・品質管理者の知識整理、製薬企業に就職を希望する学生の基礎教育を支援し、医療・学術と製造現場の連携構築を模索しています。

本年のGMP初級講座2017は、すでに定員に達する86名の参加者を得て5月19日（金）にスタートし、6月、7月の第3金曜に第2回、第3回を予定しています。初回は本学大石教授による医療現場の医薬品安全管理の解説を皮切りにGMPの基本原則、組織体制や法規制の基礎など6項目を詳説し、最後に習得テストを実施しました。連続講座をすべて受講し成績基準を満たした受講者には修了証が交付されます。今後は10月、11月の第3金曜日にGMP調査、微生物管理や包装関連など一步踏み込んだ実践講座を予定しています。詳細は本学ホームページを参照ください。



2016年GMP初級講座アンケートより



が行われました。
他にも一般演題では、退院支援やストレスマネジメントに関する4演題が発表されました。

次回の第5回学術集会は、2018年1月28日（日）に大阪大学中之島センターにおいて開催され、滋慶医療科学大学院大学宇田淳教授が大会長を務めます。

修了生の活躍

「私にできること」を追求して

三菱京都病院

看護師長 山田 利恵さん(3期生)



真中が山田さん

看護師となり約30年経過しました。医療や介護をめぐる環境が大きく変わっていく中、看護師長として危機感を感じながら「自分にできること」は何かを考えていました。このまま「何もしない」ことも選択肢のひとつであり、環境や状況に身を委ね、目の前のこと一生懸命集中することもありかな、と思っていました。そのような中、偶然にも自施設に研究のために来られていた飛田伊都子先生の研究のお手伝いをさせて頂く機会がありました。その出会いが入学の一番のきっかけです。また本学は、社会人、学生に配慮し、講義は夕方と土曜日にあることや長期履修の制度があることも大きなきっかけでした。

入学して良かったことは、修士論文作成のため指導を受ける中、漠然とした結論や過程を考えるだけでなく、きちんと筋道を立てて結論まで導ける能力や文章作成能力が向上しました。また、わかりやすく研究成果の要点を相手に説明するプレゼンテーション能力も向上しました。さらに、病院ではなかなか巡り合えない人脈に恵まれ、素晴らしい研究者の方々を身近に感じることができました。学会では研究者の方々の高いレベルでの話を聞く機会にも恵まれ、学習する上での刺激になりました。

一般財団法人ヘルス・サイエンス・センターから研究助成



5期生の高野佳子さん（現研究生・社会医療法人西陣健康会 堀川病院副看護部長）を中心とする研究チームは、一般財団法人ヘルス・サイエンス・

センターから平成28年度研究助成を受けることになりました。研究テーマは「看護労働者における腰痛発症の予防を目指した移乗介助技術プログラムの開発」であり、飛田伊都子准教授、岸村厚志研究生、米延策雄元教授、大阪市立大学伊藤正人名誉教授との共同研究によるものです。

今回の研究は、医療現場において看護教育を担う看護主任を対象に複数の異なる教育法を提供し、技術習得の習得率を測定するものです。さらに腰痛発症の要因を検討するため腰背部の表面筋電位を測定し、身体的負担

ある在校生の一日

薬剤師として医療安全分野に貢献

伊丹恒生脳神経外科病院

薬剤師 曽和 鮎美さん(7期生)

私は現在、薬剤師として病棟業務や薬品管理の業務と、医療安全管理室長としての業務を兼務しています。医療安全の仕事に携わるようになって、個人的に研修会や学会に参加していましたが、薬剤師という立場で医療安全分野を専門的に学ぶことにより医薬品のリスク管理の観点だけでなく、チーム医療のリーダー的存在になるための先駆けとなりたいと考えました。また、院内医療事故調査を経験したことで、独学での知識に不安を感じ、より専門的な知識と理論的思考、職種を超えた連携が必要だと感じました。そんな中で滋慶医療大学院大学開催の学術研究会に参加したことがきっかけとなり、大学院の存在を知って、より専門知識を習得したい気持ちが大きくなりました。



学ぶ意欲が高まったときが実行に移せるタイミングだと考えました。

入学後は医療安全に関する分野もちろん、経営組織や安全心理に関する分野も習得し、物事を多面的にとらえる思考の幅が増えたと感じています。大学院の学友にはさまざまな分野の職種の人たちが集まっているので、ディスカッションの時間がとても楽しみです。指導教員の先生方のサポートもあり、忙しい日々ですが新たなことを学ぶ喜びで毎日充実しています。

医療安全に携わる者として、卒業後は自院の医療安全管理の充実だけでなく、地域の方々と連携して学んだ知識を活かせるよう活動したいと考えています。また、薬剤師が医療安全分野において活躍できる教育、研修、研究方法などを広めていくとともに、多職種との連携を重視した地域医療のリーダー的存在として、大学院での学びを広げていきたいと思います。

平成30年度入学募集

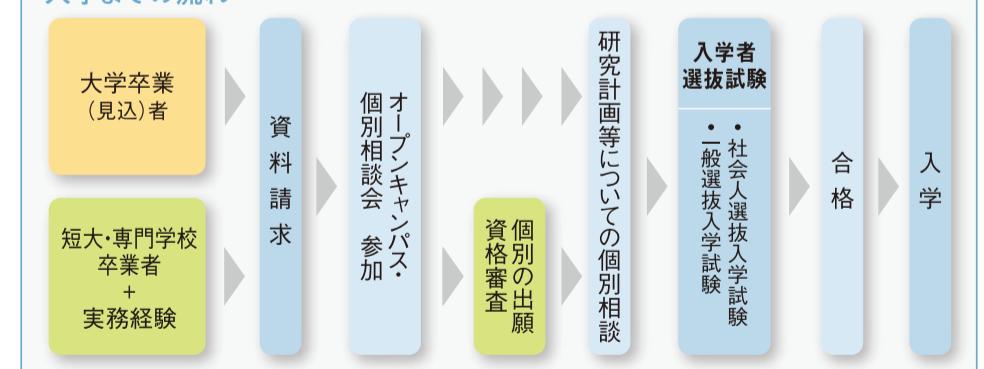
平成30年度入学試験日程は右の通りです。

オープンキャンパスの日程は、ホームページをご覧ください。個別入試相談会、授業見学は随時開催しています。オープンキャンパス、個別の入試相談会、授業見学への申込みは、ホームページからお願ひいたします。

入学試験日程(平成30年度入学)

	第1次	平成29年 9月16日(土)
前期	第2次	平成29年12月2日(土)
	第1次	平成30年 1月27日(土)
後期	第2次	平成30年 2月24日(土)
	第3次	平成30年 3月24日(土)

入学までの流れ



編集後記

超高齢社会を迎える医療現場は今、入院患者の高齢化に伴う譜妄ケア、認知症ケア、予防ケアに関わる多職種によるコミュニケーションエラーなど、新たなリスクに直面しています。リスクを低減しマネジメントしていくには、これまでにない新しい視点が必要です。

医療施設においては、患者が医療事故や感染などの脅威やリスクに日常的にさらされてい

るために、様々な安全・安心に関わる取り組みが行われています。そのような中、医療安全と施設環境との関わりについて研究を進められている鷲淳夫先生から、大変重要な点についてご執筆いただきました。

今後も、様々な立場の方から、「医療安全」について、現状や新たな視点につきまして、ご示唆をいただきたいと思います。(編)